

アイデンティティ概念の再構築の試み：イタリア人アイデンティティという事例とともに

著者	宇田川 妙子
雑誌名	国立民族学博物館研究報告
巻	30
号	4
ページ	455-492
発行年	2006-03-31
URL	http://doi.org/10.15021/00003976

アイデンティティ概念の再構築の試み —イタリア人アイデンティティという事例とともに—

宇田川 妙 子*

Towards Revisioning Identity: Another Phase of Italian Identity Discourse

Taeko Udagawa

アイデンティティという概念は、現在「アイデンティティ政治」に代表されるように、多くの弊害が取り沙汰されているが、その一方で、この概念を擁護する声もけっして小さくない。近年のアイデンティティ論は、構築主義的な転回を果たしたと言われているものの、いまだ根源的な問題は放置されているからである。本稿は、そうした問題意識の元で、アイデンティティ概念を、「関係性」という概念を新たに導入しながら再構築していくことを目的とする。実際、従来のアイデンティティ概念をもう一度振り返ってみるならば、その最大の問題は、それが異同という指標、すなわち「我々／彼ら」を分離・分類する論理によって構成されている点にあることが浮かび上がってくる。とするならば、そこにあるのは、関係性ではなくて基準である。これに対して関係性とは、関係の非決定性、多義性、偶発性、歴史性を積極的に評価した概念である。この概念とともにアイデンティティのあり方を定位し直していくならば、そこには新たな主体や連帯のあり方、すなわち新たな社会のあり方も浮かび上がってくるだろう。しかも、そうした新たなアイデンティティのあり方とは、けっして机上の空論ではなく、たとえ萌芽的ではあっても、実際に我々の周囲でもすでに見出すことができる。その一例がイタリア人アイデンティティである。それはこれまであまりにも脆弱なナショナル・アイデンティティであると見なされてきたが、別の視点から見れば、そこには、ナショナル・アイデンティティとは異なる語りの位相が見えてくるのである。この事例は、わずかな兆候に過ぎないかもしれないが、アイデンティティがこれほどまでに社会問題と化している今、その混乱のなかから新たな社会の展望を探っていくためにも、そこに

*先端人類科学研究部

Key Words : the concept of identity, constructionism/ essentialism, same/ different, relationship, Italian identity

キーワード : アイデンティティ概念, 構築主義/本質主義, 異同, 関係性, イタリア人アイデンティティ

積極的に注目して理論化していくことは決して無意味な作業ではないだろう。

Today some severely accuse *identity* of having caused and causing many serious problems, represented by identity politics, but others vigorously defend the concept as effective in spite of difficulties. Identity theory, even after the constructionist turn, has not resolved this dilemma yet. This article attempts to rethink and reconstruct the concept of identity. The key notion that this article brings into the discussion is *relationship*. In today's concept of identity, we can easily identify the logic of separating and categorizing same/ different, that is, us/ them. This logic is just a rule, and is not concerned with any notion of relationship. By contrast, relationship means undecidability by any rule, and so is ambiguous, contingent, and constructive. The relationship concept suggests that we reconstruct identity, through which we can also rethink the issues of subject, solidarity and society. This alternative version of identity is not only an armchair theory. We can find some examples in daily life, even if they are poor and slight—one of them is Italian identity. Usually this is said to be a very weak national identity. But from another point of view, we can find there another phase of identity discourse, based on relationship. We need a more accurate discussion to recreate the concept of identity, struggling with the theory and the reality harder than at present.

1 はじめに	4 イタリア人アイデンティティ
2 アイデンティティ論の現在	4.1 「弱い」イタリア人アイデンティティ
2.1 構造主義的「転回」とは	4.2 ナショナル・アイデンティティとしての「イタリア人」
2.2 主体は解体したか	4.3 もう一つのイタリア人アイデンティティ?
2.3 異同は関係性か	
3 新たなるアイデンティティの語り	5 おわりに
3.1 個体主義から関係性へ	
3.2 理論と現実との懸隔	

近代的なるものは、差異からアイデンティティを構成するのではなく、アイデンティティから差異を構成する。
(クロスバーグ 1998: 162)

自分にさわって自分の手を握りしめるたびに、そう、「私」と私は言った。しかし私は誰にそう言ったのだろうか。そして誰にとっての「私」なのか。私はひとりきりだった。
(Pirandello 1992: 126)

関係は完全な全体性からではなく、完全性を構成することの不可能性から生じる。
(ラクラウ&ムフ 2000: 199)

1 はじめに

アイデンティティ——これは、もともとは主に哲学の分野における同一律・同一性問題という議論のなかで用いられていた言葉である。しかしながら 20 世紀の半ば、周知のとおり、エリクソンが精神分析学の用語として使用して以来、他の学問分野および一般にも急激に普及するようになった。そこには、いっそう複雑化し流動化していく現代社会のなかで、主体的でかけがえない自分（自分たち）というアイデンティティの物語が自明性を失っていくとともに、だからこそ獲得しうるものとして新たに位置づけられるようになった社会事情が深く関与していると言われている¹⁾。

そして、グローバル化現象を通じてその複雑性・流動性がさらに増しつつある現在、この言葉は、たとえば「アイデンティティ政治」などの表現に代表されるように、さらなる論争的になっている。セルフ・アイデンティティ、ナショナル・アイデンティティ、エスニック・アイデンティティ、ジェンダー・アイデンティティ、カルチュラル・アイデンティティ等々、今やアイデンティティという言葉は、さまざまな冠をかぶりつつ百花繚乱状態の体をなしているのである。

もちろん、たとえば日本においては、この語彙は外来語のまま流通してきたためか、一般にはそれほど馴染みがあるとは言えないかもしれない。たとえこの言葉を用いても、違和感を訴える人も多い。しかし、それを「私（私たち）は〇〇である」という意識であり主張であると言い換えるなら、そうした意識の確立や表明がきわめて重要な論点であることは、今や誰もが同意するであろう。

また、現在のさらなる問題とは、各自（各集団）が自らのアイデンティティを主張することによって、互いのアイデンティティをめぐる闘争が激化しているという点で

ある。アイデンティティは、獲得すべきものとして積極的に意味づけられている一方で、その追求が社会全体の共約可能性を閉ざしかねないという弊害にも注目が集まっている。そしてここには、昨今の主体概念をめぐる議論も深刻な影響を与えている。

主体がそれ自体で自立し統一したものであるという考え方は、今やよく知られているように近代以降に作り出された幻想である。しかもそれが、人々を権力へと効率的に取り込む装置であることも明らかになると、アイデンティティの追求とは、実はそうした近代の営為を一步も出ていないどころか、その権力の強化にもつながってしまうのではないかと、という疑念も出てきたのである。そしてこの問題は、そもそもアイデンティティとは本質的に決定されているものではなく歴史のなかで社会文化的に構築されてきたにすぎないとする議論とも連動し、このいわば構築主義的な論調によって、従来までのアイデンティティ概念の基盤は、現在急激に崩れつつある。もはやアイデンティティという概念を「賞味期限切れ」²⁾とする見方も少なくない。

さてこうしてみると、アイデンティティとは、現代の社会問題を糧として流通するようになったばかりでなく、近年では、社会問題そのものを産出し増殖させている概念である。その意味では、それ自体が現代の社会問題の一つであるとも言える。本稿は、このように近年ますます混迷の度を深めているアイデンティティという言葉、ただ諸問題の根源として切って棄てるのではなく、むしろ、たとえ暫定的ではあっても定位し直すことはできないか、という問題意識から出発するものである。

たしかにアイデンティティは、今や既述のように深刻な問題を抱えている。しかし、だからといってこの言葉を避けるだけでは、そこに凝集されている問題自体は置き去りにされたままで何の解決にもならないに違いない。また、以上のようなアイデンティティ批判に対しても、近年反発が大きくなっている。人々は、アイデンティティに重大な問題が潜んでいるとしても、この言葉を完全に手放してしまうことには大きな躊躇と危険性を感じているからである。とするならば、そうした反—批判をあまりにもナイーブであると退けてしまうのではなく、その逡巡にこそアイデンティティ問題の複雑さが象徴されていると見なしていく必要があるだろう。そもそも、アイデンティティという言葉をめぐる問題とは、それが実在するのか否かではなく、後に詳しく見ていくように、その語られ方にある。つまり、この語がこれだけ人口に膾炙している現状を見るならば、それを忌避するのではなく、その語り方を異化していくことこそが求められていると、筆者は考えるのである。

では、従来のアイデンティティ概念を異化する新たな語り方とはどんなものか——本稿は残念ながら、この問いに満足な回答を与えることはできない。しかしながら、

そのための試論として、後半では、筆者自身の調査地であるイタリアにおけるイタリア人アイデンティティという事例の考察をとおして、その可能性の一端を提示していきたい。

イタリア人であるという彼らの意識がきわめて希薄なことは、世界的にもかなりよく知られている。しかし、だからといって彼らは「イタリア人である」ことを手放そうとはせず、実はさまざまな場面で用いており、ここからは、むしろ、彼らのイタリア人アイデンティティを、弱い／強いという形容詞で説明しようとする語り自体がもつ問題点が浮かび上がってくる。

そもそもイタリア人アイデンティティを弱いとみなす際の基準となっていたのは、近代国家の成立とともに醸成されてきたナショナル・アイデンティティのモデルである。また、そのナショナル・アイデンティティとは、アイデンティティ全般のなかでも、その問題性を最も象徴的に体现するものである。ところが、彼らの用いる「イタリア人」には、後述のように、いわゆるナショナル・アイデンティティ的なものとは異なる位相を見て取ることができるのである。とするならば、彼らのイタリア人アイデンティティをもう一度詳細に振り返ってみることは、それが大抵はナショナル・アイデンティティの枠内でしか語られてこなかった概念であるがゆえに、アイデンティティ概念をその内部から異化するという意味でも、いっそう興味深い試論となるに違いない。

では、まずは、現在アイデンティティが抱える問題とはいったい何なのか、現在のアイデンティティの語りに見られる問題点を整理することから議論を出発させていこう。

2 アイデンティティ論の現在

2.1 構築主義的「転回」とは

アイデンティティに関する議論は、現在、ホール等が端的にまとめているように (Hall 1992, Calhoun 1994, ホール 1999)、構築主義的な論調が主流をなしていることはすでに述べたとおりである。それは、アイデンティティとは、いかに堅牢に見えようとも、けっして各人（各集団）に生来備わっている不変の本質に由来するものではなく、歴史のなかで社会文化的に作られたものであるという考え方である。本質などというものはどこにもなく、あるのは、何ものかを本質として産出・結晶化させてきた歴史（または権力）であると言い換えることもできる。それゆえ近年のアイデン

ティティ論は、個々具体的なアイデンティティに関して、それが歴史的にどう構築されてきたかを解明するという作業にかなりの労力を費やしているといっても過言ではない。

また、こうした構築主義的な視点は、アイデンティティの多元性という考え方にも密接につながる。従来、特に集団的なアイデンティティの場合、その内部はあたかも均質・同質であるかのようにみなされてきたし、皆が同じアイデンティティを共有しているからこそ、互いに連帯して自分たちのアイデンティティを主張することができると考えられてきた。しかしながら、同じ民族、同じ性であっても、その内部は多様であることは、たとえば、女性というアイデンティティをもはや安易に主張できなくなっているフェミニズムの歴史を一瞥すれば明らかである（宇田川 1998a）。

そもそも個々人のアイデンティティ意識は、よく考えれば当たり前のことだが、一つだけに収斂するものではない（Sökefeld 1999）。我々は、民族、性別、性的指向、年齢、階層など、さまざまな場面や位置づけに応じた複数のアイデンティティを操作しながら生活をしている。ゆえに或るアイデンティティが或る個人にとっていかに重要なものであるとしても、それは、それら複数の位置づけのなかで場面に応じた選択と決定がなされて表面化したものであるし、場面や文脈が異なれば、他のアイデンティティ意識が（やはりその他の位置づけと交渉しながら）前面に出てくる³⁾。たとえば、同様の視点に立つ論者の一人ムフは、アイデンティティを「種々の主体位置の集合によって構成されたもの……（さらに言えば）それらの重層的な決定と置き換えの絶えざる運動」（ムフ 1998: 156）であると見なしている。

そしてこのことは、どんなアイデンティティも、その内部には裂け目や矛盾を抱えていることを意味している。実際、多くの集合的アイデンティティは、他の文脈や場面ではその同質性に揺らぎを見せ、内部の多様性が表面化して分裂を引き起こしたり、さらには、その正当性の根拠を失って存続の危機に晒されてしまうこともすでに知られている。その典型的な一例が、黒人女性、第三世界女性、レズビアン等々の多様な女性たちから異議を突きつけられた「女性」というアイデンティティだが、もちろん「黒人女性」、「第三世界女性」、「レズビアン」も偶然的で不安定な構築物でしかない。さらには、たとえば民族アイデンティティのもとではしばしば女性アイデンティティが無効化されてしまうように、一つのアイデンティティが他を抑圧するという事も起こる。アイデンティティとは、それ自体が本来的に多元的であり、複数の要素間でなされた諸決定の産物として表出したものであるという意味においても、基本的に構築的な所産なのである。

ところで、以上のような構築主義的視点の隆盛とは、先章でも述べたように、アイデンティティが現在、否定的な評価をされはじめるようになってきているという現状の反映でもある。アイデンティティの主張はしばしば、あまりにも本質主義的な形でなされることによって、外部に対しては他との了解可能性を閉ざして葛藤や排除を引き起し、内部に対しても多様性を抑圧しさまざまな紛争を惹起させてきた。特にグローバル化が促進され、さまざまな差異の主張と承認の要求が高まりつつある現在、「アイデンティティ政治」は互いの共生ではなく闘争・憎悪へとつながってしまうことが少なくない。また、そうした本質的なアイデンティティという考え方は、各個人にとっても大きな負荷となっている。アイデンティティの意識化・主張は、往々にして、或る個人を常にそのアイデンティティの枠内に規定し、他のあり方の可能性を閉じてしまうからである。構築主義的パラダイムとは、それらの弊害がアイデンティティの本質視に由来していることを指摘し、その虚構性を徹底的に暴くことによって、処方箋を見出そうとしてきた論法である。

しかしながら、それで問題がすべて解決したかと言えばそうではないことは先にも指摘したとおりである。そして、そこに依然として残されている問題を整理するならば、それは、主体性や連帯という言葉に凝縮されていると考えられる。

アイデンティティは、特にそれが一般に流布しはじめた当初は、主体性とほぼ同義に用いられてきたし、アイデンティティの主張は、それが主体性の獲得・確立につながるかとされるからこそ称揚されてきた。なかでも、ホールやバーバ等の議論に代表されるように、アイデンティティをめぐる最も活発な議論がコロニアル批判と密接に結びついてきたことは注目し得る（三浦 2004）。コロニアルな状況下で他者化され十全な主体性を認められてこなかった者たちにとって、この語は、自らの主体を主張し、その承認を求めるためには最も有効な概念であり道具であった。そして、そうした主張を支えるものとして重視されたのが、アイデンティティを同じくする者たちの連帯であった。

ところが、アイデンティティが、構築主義者の言うように本源的に作られたものならば、これらの営為も、その根拠や正当性を失くしてしまいかねないことになる。また、構築主義的なアイデンティティ観は、個々人の主体性を虚構と見なすがゆえに、あまりに社会還元主義的で、社会変化の余地を奪ってしまうという批判も出てきた。つまり、アイデンティティには積極的に評価すべき側面がある（あった）にもかかわらず、構築主義的なアイデンティティ論は、それをも否定してしまうのではないかという危惧が、現在、次第に大きくなってきているのである。

実際、現実の社会状況に目を向けるならば、さまざまなマイノリティの権利獲得運動など、依然として承認や連帯は危急の課題であり、そのためには（少なくともとりあえずは）本質主義的なアイデンティティ概念が有効かつ必要である場面は少なくない。これは、構築主義論者も認めるところであり、そうした現状から見れば、構築主義とは現実から乖離した空論にすぎないとも言える。

ゆえに近年では、周知のとおり、あたかも両者の立場を調停するような形で「戦略的本質主義」という言葉が頻繁に用いられるようになってきた。この言葉は、たとえ構築主義的なアイデンティティ観に立つとしても、現実社会において或るアイデンティティの主張が必要な際には、本質的なアイデンティティを戦略的に装い、互いに連帯していこうとするものである。しかしながら、この「戦略的本質主義」も、行使の過程においては、やはり次第に本質という考え方に内在している問題が表面化してしまい（Kuper 2003）、その乱用は、理論と現実との亀裂をより決定的にしてしまう危険すらある。現在アイデンティティ論は、その致命的な欠陥が顕わになる一方で、その有効性や手放し難さもさらに強まり、このように二極化した議論の揺れをもちや調節できない地点にまで来ているのである。

とするならば、今我々に最も必要とされているのは、その論点が本源的にはどこにあるのか、という問いをあらためて掲げていくことではないだろうか。

そもそも構築主義と本質主義の対立は、見かけどおりのものではないと考えられる。たしかにこれまでのアイデンティティ論の最大の問題点は、本質という観念にあり、構築主義はその虚構性の暴露に積極的に取り組み、功績を上げてきた。しかしその議論は、本質という観念に代わるものを提示する方向には進まなかったため、逆に、その虚構がいかに現代社会で重視され消し難いものなのかを浮き上がらせるにとどまっている。そもそも構築主義的な立場を徹底させ、本質もまた言説の一つであるとみなすならば、それが（いかなる形であれ）我々の社会に存在するという一点においては、構築主義と本質主義の差は、実際上はほとんどなくなってしまうだろう。構築主義も、本質という観念（の重要性）を本源的に否定しているわけではないのである。このことは、上記のように構築主義者たちも、現実的な対処療法としてはしばしば「戦略本質主義」を採用しているという事実により端的に表れている。

またさらに注目すべきは、構築主義者の主たる論点の本質という問題にある一方で、本質主義的（あるいは反構築主義的）な議論は、むしろ主体性や連帯をめぐって展開されており、両者の対立は、実は論点が噛み合っていないという点である。とするならば我々は、そもそも主体性や連帯とは本質がなければ発揮し得ないのか、とい

う問いこそを問うべきではないか。

もちろん、近年の主体批判をふまえるならば、主体性という概念自体も近代の虚構であるがゆえに、主体性に対する積極的評価を前提として問いを設定することそのものに疑義を唱える者もいるに違いない。すでに、エイジェンシーという語を新たに用いて、本質に囚われない新たな主体の可能性を模索していこうとするバトラー（バトラー 1999）等の試みもある⁴⁾。しかしながら、実際には「戦略本質主義」という妥協の産物がいまだ効力を持っているように、その試みは十分な成果を上げてはおらず、むしろ新語の採用によって、根源的な問題を回避してしまう危険性も否定できない。そもそも、従来の主体概念がいかに問題含みであれ、その問題は、我々が主体性という言葉に託してきたものすべてを否定するものではないだろう。つまり、これまで主体が本質という観念といかに密接に結びついていたとしても、主体のあり方には他の選択肢がないのか、そもそも主体を本質に結び付けてしまう考え方とは何なのか等々の問題は、いまだ真剣には問われていないのである。その意味では、構築主義／本質主義という対立図式（の存続）自体が、実は、本質と主体とをあたかも同一線上の問題とする考え方を温存させる装置だったと言えるのかもしれない。

2.2 主体は解体したか

さてこうしてみると、現在のアイデンティティ論は、構築主義的転回を果たしたかに見えながらも、その根元的な問題にはまだメスを入れるに至っていないことが明らかになってきた。そしてその問題とは、端的に言うならば、本質的なアイデンティティが無ければ主体性や連帯は成り立たないのか、という問いに凝縮される。とするならば、我々はここで、そもそも主体性とはいったい何のことなのか、連帯とはいったいどんな関係なのかについても、さらに本格的な考察を展開していく必要がある。

まず主体という概念に関してだが、それがアイデンティティ概念の中心的な問題の一つである（少なくとも、あった）ことは改めて指摘するまでもない。このことは、すでに述べたように、アイデンティティという語の隆盛が、特にコロニアル批判と時期を同じくしていたという経緯に最も端的に表れている。アイデンティティは、主体性を剥奪されてきた者たち、いまだ主体性を確立していない者たちの主体性を主張し希求する声として機能することが少なくなかった。

とはいえ、そこで希求されていた主体性は、実は、その「死」が宣言されてからすでに久しい概念であるとも言われている。主体の「断片化」「脱中心化」「ハイブリッド化」等々の言葉が流布しているように、少なくとも、自立的・自発的で負荷をもた

ない一貫した主体というあり方は、近代の臆見にすぎないことは今や十分明らかになっている。しかも、そうした自立した主体という考え方が、主体を権力に「従属」させるための装置であったということも、特にアルチュセールやフーコー以降さかんに指摘されてきた。ゆえに現在の主体論は、「主体の後に誰が来るのか」という問いのもとで、新たな主体のあり方やそれに代わるものを模索しようとする議論へと移行しつつある。先述のエイジェンシーという言葉も、その一つである。

しかしながら、その試みはまだ中途でしかなく、きわめて混乱した状況にあることは、たとえば、まさに『主体の後に誰が来るのか』というタイトルを冠した論集(ナンシー編 1996)を一読すれば分かるだろう。たしかにこれまで主体に想定されていた独自性なるものは幻想に過ぎないとしても、だからといって主体の全てが権力に還元されるなら、我々の行動はその枠を出ることはなくなってしまうからである。この問題は、特にコロニアルな状況下で他者化された者たちにとっては、いっそう深刻である。彼らは、現段階ではしばしば十分な主体として認められておらず、その承認は急務である。ところが、主体が近代の産物にすぎないなら、安易な主体の主張は、結局近代の権力装置への参画・荷担を意味することとなり、さらには別の他者を作ってしまうことにもなる。ただし、それを危惧するばかりでは、何もできずにコロニアルな現状を変化させる方図すら失ってしまうだろう。では、このジレンマを解決するにはどうしたらよいのか、今のところは、既述のようにせいぜい「戦略的本質主義」という対処療法に頼るしかないのである。

また、同様の問題は、以上の啓蒙主義的な主体観とは別の(むしろ全く逆の)個人観に依拠している社会学的な議論でも起きていることも付け加えておきたい。社会学は、周知の通り、とくにデュルケーム以降、「個人に対しては外在し、個人の上に否応なく影響を課する」(デュルケーム 1978: 54) 社会的事実を研究の主眼とする一方で、個人をいわば過度に社会化された存在として設定してきた。しかしこの個人観は、個人の主体性を無視しているとすぐに批判されることとなった。その結果、主体性という観点をどう取り入れて、社会と個人の間をどう理論化していくかが、現在にいたるまでの社会学の枢要な論点の一つとなった。いわゆる「個人—社会」問題である。実際、あまりにも社会学的な個人観に対しては、象徴的相互行為論やエスノメソドロロジーなどの主観主義的なアプローチの創出も試みられてきたし、現在では、たとえばギデンズに代表されるように、その両者を積極的に調停していこうとする理論も模索されている。しかし、いまだ論争に決着はついておらず(アレグザンダー他 1998)、主体性という問題は、社会理論においても的確に定位できないままになって

いる。

では何故、こうした行き詰まり状況が、多くの分野で、かくも長い間続いているのか。

ここで以上の主体をめぐるさまざまな議論をもう一度見直してみるならば、まず、そのどれもが、主体性という問題を、基本的には、各個人が社会や他の人々に左右されずに有している独自の意思や言動と見なしていることが浮かび上がってくるに違いない。その典型は近代啓蒙主義的な主体観だが、社会学の論争や、啓蒙主義的な主体の「次」を模索する議論においても、それらが想定し積極的に評価しようとしているのは、この意味での主体性である。つまりこれまでの議論は、それがどんなものであれ、主体をそれ自体で独立した存在と見なすという与件を捨ててきてはいないのである。そこで実際に論議されていたのは、その意味での主体性が、個人の行動のどこまで覆っているのかという、いわば主体性の度合いでしかなかったとも言える。このことは、我々がいまだに、主体性とはそもそも何のことなのかについて、本格的な問い直しをしていないことを意味しているだろう。

もちろん、この前提に異を唱える議論もすでに多くなされている。たとえば、その一つは、フッサール、ハイデッガー、メルロ＝ポンティなどの議論を受け継ぎ、間主体性、間身体性、世界内存在などの言葉を積極的に用いながら論じている一群である。そこでは、これらの用語に端的に示されているように、主体性の生成には他との関係こそが必須であり、むしろ他との関係という機制にこそ、主体性という問題の根元があるという主張がなされている。ホール（Hall 1992）は、こうした議論の系譜をマルクスやフロイドにまでたどっているが、スパイロ（Spiro 1993）も述べているように、そもそも近代西洋においても、主体観は啓蒙主義一色に染まっていたわけではなく、いわば関係主義的なそれも盛んに論じられ続けてきた⁵⁾。また同様の考え方は、近年のアイデンティティ論においても引き継がれている（Hall 1995）。それは、そもそもアイデンティティとは、他との差異がなければ成立しないという議論である。にもかかわらずこの差異が、近代の論理の浸透のもとで自他の異同という考え方へと転換していくことによって、主体の同質性・純正性・本質性という考え方が生み出され、ひいては主体を自立的な個体として設定することになってしまったという批判が、この種の議論の主眼となっている。

とはいえ、こうした議論の広がりにかかわらず、いまだに主体論が近代的な幻想から解放されていないように見えるのは、それらの批判や再考論においても、実は、従来と変わらない与件が、もう一つ存在しているためではないかと考えられる。それ

は、これらの議論がいかに従来の主体観を批判または否定し、そこに他者との関係などの観点を新たに導入しようが、その考察は最終的には、主体や自分という問いに到達・回帰してしまうという点である。

このことは、たしかに、主体を主題とする議論なら当然のことだと言われるかもしれない。しかし、主体性という問題が、他者との関係や差異として論ずべきものなら、議論の中心もそこに移るべきではないだろうか。実際、現在注目されている他者との関係や差異という言葉は、新たな主体性を考察し描写するための道具や形容詞にとどまっているように見える。間主体性、間身体性、主体の脱中心化、断片化、ハイブリッド化、多元的アイデンティティ、さらにはエイジェンシーなど、そのすべては、主体（従来の主体の批判）に始まり主体（新たな主体の模索）に終わるという論法の域を出ておらず、いまだに主体こそがすべての議論の中心をなしている。そして、こうした主体への最終的なこだわりこそ、主体をいつのまにか個として実体化し、そこに本質という観念を滑り込ませてしまった原因であり結果であると思われる。つまり主体論とは、その問題定立のあり方にまで遡るならば、それが他者との関係や差異という問題を論ずることそのものであるというパラダイムへと、今や、より積極的に移行すべき時期に来ていると考えられるのである。

2.3 異同は関係性か

ところでこの問題は、近年、アイデンティティという言葉が主体という語以上に用いられるようになってきた状況とも、若干逆説的ではあるが、実は密接に関連している。

筆者は、これまで主体とアイデンティティという語についてその違いを明確にしないまま議論を続けてきた。一般的にも、主体、アイデンティティ、さらには自己、個人等々という言葉（英語で言えば *subject*, *identity*, *self*, *person*, *individual* など）の定義は曖昧で、時には互換的に使用されたり、論じられている分野や文脈によって定義が異なったり、さらには歴史的に変化することも少なくない。たとえば、人類学の視点を社会中心主義から個人へと転換しようとする試みとして評価されたコーエンの著作 *Self Consciousness: An Alternative Anthropology of Identity* (Cohen 1994) においても、*self* と *identity* とは何のためらいもなく同義として用いられている。そして、こうした状況が現在、必要以上の混乱を招いていることは、ハリス (Harris 1989) にも指摘されているとおりである。

もちろんここでは、これらの定義を整理し明確化するという困難な作業を行う余裕

も能力もない。しかし、特にアイデンティティという語が隆盛してきた経緯を振り返ってみると、少なくともアイデンティティと主体のあいだには、微妙ではあるがきわめて重要な違いが浮かび上がってくる。アイデンティティとは、主体という言葉では不十分にしか含意できなかった何かを表現しうるものとして期待されてきたのであり、その何かとは、関係性あるいは連帯という考え方ではないか、と考えられるのである。

そもそもアイデンティティとは、たとえば栗原（栗原 1998）がまとめているように複数の語義が絡み合っている概念だが、その主たる語義は、リオータル（リオータル 1996）が「同一としてのアイデンティティ」と「自己としてのアイデンティティ」とを区別したように、或るものと或るものが同一であるという意味と、或るものがそれ自身であるという意味の二つに大別して考えることができる。前者は、たとえば、以前の私と今の私は同じか否か、私たちは同じ日本人なのか、そして何をもって「同じ」と見なすのか、そもそも「同じ」とは何なのか等々、いわば同一律にかかわる問題である。これは、言葉を換えれば、以前の私と今の私との関係、または私たちのあいだの関係という関係性を問うている側面である。一方、後者は、或るものがそのものとして、すなわちそれ自身である意識・主張し、それ自身として認められるという側面であり、ここで顕わになっているのは、関係性というよりも自己性という問題である。もちろんこの自己性も、或るものがそれ自身であることを意識するという過程では、自らに対する反省的な関係が生じており、その意味では関係性の問題であると言える。しかし、その場合の関係性は、あくまでも自己であることを意識し主張するためのものであり、ゆえに両者は質の異なる問題構制であると見なす必要がある⁶⁾。

さてこのように整理してみるならば、以上の二側面のうち自己性は、すでに論じてきた主体性の問題であるのに対して、同一性の側面が、関係性あるいは連帯という問題につながっていくと考えられるだろう。そして、アイデンティティとはこの二側面をともに有する言葉としてあらためて位置づけることも可能となる。アイデンティティは、主体という言葉に（少なくとも表面上）不足していた関係性にも関心を払い、それと主体性を積極的に結び付けようとする概念であるとも言い換えられるのである。

実際、これまでも、アイデンティティとは「個人のさまざまな欲求がある形へと統合された『パーソナリティ』が、社会・文化とどう関わっているかを表す概念」（草津 1995: 86）であり、ゆえに両者を「関連させつつ考察する手がかりをあたえるものである」（草津 1993: 3）等々の指摘がなされている。エリクソンも、「アイデンティ

ティとは、個々人が個人の核のみならず共同体・文化の核へと位置するプロセスのことであり、それは、実際、この二つのアイデンティティのアイデンティティを確立するプロセスである」(Erikson 1979: 265-6)と述べている。

また、アイデンティティの語が、先にも触れたように、昨今主体という語に代わって流布するようになったのも、このためであると言えるだろう。現代は、流動化・多様化が進み「差異と承認の政治」が激化・複雑化している時代である。このため、主体性を確立・主張しようとするならば、他との関係がいつそう不可避になっている。なかでも、特に近代的な主体概念によって他者化されてきた者たちにとっては、自らの主体性を立ち上げるためにもまず必要になるのは、互いの連帯であった。近年流通するようになった集団的アイデンティティやアイデンティティ政治という言葉には、こうした連帯としての側面が強く意識されている。

しかしながら、アイデンティティのこの側面（あるいは、アイデンティティに期待されていたはずのこの側面）が、十分に理解され咀嚼されているかと言えば、残念ながら、今のところはそうではないと言わざるを得ない。周知の通り、連帯という問題も、少なくとも現況に即してみるならば、主体と同様きわめて厳しい批判にさらされている。連帯とは、同じ者同士の関係は深める一方で、しばしば他者を排除する論理ともなり、むしろ、異なる者を排除することによって自分たちの同一性を作り出し強化する機制であることが明らかになってきたからである。アイデンティティを基盤とする連帯は、しばしばアイデンティティの異なる者たちを排除・差別し、彼らとの争いを激化させてしまう。

とするならば、この議論は先の主体問題と同じ地点へと戻ってしまい、連帯・関係性という側面を導入したとしても問題解決には何ら貢献しないように見えるかもしれない。しかし、こうした状況に陥っていること自体が、我々がその意義を的確に理解しえていないことの証であると考えられることもできる。たとえば、上記の論法では、連帯をするための最も重要な基準は、同一か否かという点におかれていることは明らかだが、連帯とは果たして同一という指標に還元しつくされるものなのだろうか。

そもそも同一と思われているものも、先述の構築主義的な視点から見れば、歴史的文化的な産物であり、あくまでも或る具体的な文脈のなかで、一時的かつ部分的に同じものとして出現し認識されたものである。たとえば、今の私と昔の私が同じであるということ、私が日本人であるということ、さらには私と彼女が日本人として同じであるということ等々、これらの関係では、そのどれをとっても完全に同一律が成立しているわけではない。それらは互いに部分的には同じかもしれないが、当然のこ

とながら違いも大きく、可変的でもある。しかし、それでも同一だという主張がなされるのは、そこにはたとえ一部ではあっても恒常的に同じものがあるはずであり、それこそを肝要と見なす考え方が、議論の最初から暗黙の前提として与えられているためである。

この恒常的な同一性を重視するという与件は、まさに本質という概念に相当し、それが既述の啓蒙主義的な主体観と同根の臆見であることは明らかだろう。同じか否かという判断は、主体を本質視しているからこそ重視され、同時に、その判断は主体をさらに本質化していく。異同という指標は、いかに一時的・部分的等々の保留を付けようとも、同じものである「我々」と、異なるものである「彼ら」という分類・分断を容易に生み出し、そこに本質という物語を滑り込ませ、その分類・分断をさらに根柢づけてしまう危険性を有しているのである⁷⁾。

そして、この異同の判断とは、その区別の基準をどこかに想定しながらなされていることに気づくならば、そこには、さらに重要な問題が浮かび上がってくる。それは、異同という関係とは、果たして関係性と言えるものなのか、という問いである。

実際、判断基準が存在する（と期待されている）ということは、それが誰のものであれ、すべてがその基準によってすでに計算され決定されている（と期待されている）ことを意味している。とするならば、そこで一義とされているのは、関係性ではなく基準や規則であるに違いない。そもそも関係性という問題は、基準・規則が不確定で計算が不可能であるからこそ、論ずべき問題として表面化してくるものではないだろうか。エピグラフのラクラウとムフの言葉を繰り返すならば、「関係は完全な全体性からではなく、完全性を構成することの不可能性から生じる」。つまり、けっして事前に計算することはできず、一回ごとの交渉のなかで個別に決定されるしかないからこそ（あるいは、関係をそうした視点で考えるからこそ）、その関係が関係性として意味を持つてくるのである。にもかかわらず、そこに異同という指標を介入させるならば、その途端、問題はそれを判断する基準・規則へと還元され、関係性は喪失してしまう。そしてそこに残されるのは、せいぜい異同の基準が誰のものかという、基準の正当性をめぐる争いでしかなく、その結果が、上記のような「アイデンティティ政治」の現状であると推察される。それはけっして、関係性をめぐる争いではない。

3 新たなアイデンティティの語り

3.1 個体主義から関係性へ

さてこうしてみると、我々は今こそ、関係性という概念を積極的に評価していくことによって、アイデンティティ概念を新たに定位し直していく必要があるだろう。

そもそも我々はこれまで、社会であれ個人であれ、それらを或る全体性をもつ個体として想定する傾向が高く、その意味ではきわめて個体主義的な発想に支配されてきたと言える。もちろんその典型は、既述の啓蒙主義的な主体観や社会学的な社会観に見られるが、ここで言う全体性・個性とは、それ自体の独立性や完結性だけを意味するものではない。

たとえば、社会学的な議論における個人は、けっして独立した存在ではなく、社会の一部として他の個人とともに社会を形成していると見なされているため、一見、個人の部分性や関係性を前提としているように思われる。しかしながら、そこでの個人と個人との関係は、社会によってすでに規定されているか、規定されるべきものとされており、とするならば、そこで一義的な問題となっているのは、既述のように、関係性ではなく規則である。そして個人は、そうした基準や規則を内在化した（すべき）存在、すなわち社会化された（されるべき）単位となり、やはり個体的に扱われていると言えるだろう。ここからは、個人を社会の雛形と見なす構図が浮かび上がってくるが、しかもこの構図が、主体が実は「従属」であったという近代の機制と同じものであることに気づくならば、そもそも近代的な主体性という概念とは、こうした個体的発想を前提として生まれ、それを強化する装置であったと推察することもできる。

この発想のもとでは、関係性という問題は、個体間をただ調整するための規則・基準という形でしか想定されえず、実際、今のところはそうした議論にとどまっている。もちろん、規則や基準のない個体間の関係もある。しかしその場合も、いずれは規則・基準が見出されることが期待され、関係性はせいぜい、あらかじめ規則によって調整されている個体間と、これから調整すべき個体間の二つに下位区分されるにすぎなくなっていくのである。

そしてこの区分が、異同という指標に対応していることも、もはや明白だろう。すでに調整されている個体同士とは、同じ基準を持つという意味では同じものである。一方、基本的に調整できないものは、互いに違うものと見なされる。もちろんそこに

何らかの調整の基準が見出せれば、両個体は上位の基準（個体）へと組み込まれていくが、そうでなければ、独立する個体のまま互いに争い排除しあうことになる。この動きは、主体の本質性・独自性という、さらなる個体主義のイデオロギー装置によって正当化され激化していくことも少なくない。近年のアイデンティティ問題の根源とは、このように個体を基準とし個体化を目指そうとする動きにあるとも言える。

では、こうした個体主義的な発想を廃して、関係性そのものを十全に評価していくことはできないのだろうか。個体主義に囚われない関係性とは、一体どんなものなのだろうか。

たしかに、デュモンの『個人主義論考』（デュモン 1993）でも明確に指摘されているように、個体主義は西洋的な思考一般に根深く浸透している知の枠組の一つであって、それを解体することは容易ではない。しかしながら、近年の構築主義的な視点を徹底させるならば、個体とはどんなものであれ、あくまでも作られたものであって、ゆえに個体間の関係も可変的で部分的でしかない。つまり、安定的な規則・基準も、それに基づいた安定的な関係も個体も、根源的にはけっして存在しないことになるわけだが、とするならば、これまで看過されてきた関係性という問題とは、まさにこの関係の一時性や部分性をどう評価し語り直していくか、にかかってくる。

この点に関しては、同様の問題意識に立ち、近年「根源的民主主義」の提唱者としても名高いムフやラクラウの議論が非常に興味深い。彼らは、その議論の過程で、「敵対性」という関係に注目した（ラクラウ&ムフ 2000: 3 章）。敵対性は、これまでしばしば論理的矛盾や現実的対立として理解されてきたが、彼らによれば、それだけでは不十分であるという。そもそも矛盾および対立とは、敵対性を、概念的または現実的にすでに可知化・対象化されたもの同士の関係と見なした上での議論である。ところが実際には、論理的な矛盾も現実的な対立も見られないのに、敵対関係が生まれ、事実上の対立へと化していくことも少なくない。このことを理解するには、そこに構築主義的な視点を導入する必要があるという。つまり、すべては不完全かつ多義的な性格に浸透されているという視点を前面に出すならば、個々具体的に発現する関係とは、そうした多義性のなかで偶発的になされる重層的な決定の産物にすぎないことになる。ゆえに、それを完全に可知化・対象化することはできず、或る対立が別の文脈ではそうではなくなることも、その逆もあり、その意味では、敵対性とはすべての関係に必然的に内在していることが浮かび上がってくるのである。

このことから、ラクラウとムフは、敵対性とは「みずからを完全に構成することの

不可能性」(ラクラウ&ムフ 2000: 200)の徴候であると述べ、そうした社会の不確定性へと議論を進めていく。ただしここで若干立ち止まって、この敵対性が、関係を、従来のように規則や基準へと還元しない概念であることにさらに着目するならば、それは、まさに関係の関係性そのものを評価する言葉であるとも言えるだろう。そこには、敵対性と表裏をなすという意味での「友人関係」という言葉を加えることもできる。つまりどんな関係も、互いがそれぞれに重層的で多義的であるがゆえに、その間も重層的かつ偶発的に関係が決定されていくという意味では、「敵/友」関係を基盤としていると考えられるのである。そこから、固定的な「我々/彼ら」関係のみに帰結しない関係を模索することも可能になってくる。ムフはさらに、他者とは、異同の指標によって排除へとつながる「敵 enemy」ではなく、敵対関係にはあるが相手を認め合い時には連帯しうる相手としての「対抗者 adversary」と見なしていくべきだという議論も展開している(ムフ 1998: 8)。これは、「我々/彼ら」関係という二律背反的な連帯/排除の関係から、「敵/友」関係という多義性と偶発性を重視する関係観への積極的な転回である。

そしてこの関係観は、たしかに「ゆっくり休める夜」(ホール 1990: 79)を保証する安定的な社会やアイデンティティを生み出すものではないが、だからといって何の足場もなく混乱した社会像へとつながってしまうわけでもないことにも注意したい。むしろそれは、我々がその時々の関係において行う「決定」の重要性を示唆しており、この決定という考え方には、まさに従来の主体論を根本的に再考するきっかけが含まれている。

決定という概念とは、決定する主体とは何かという問いを喚起するため、一見、従来どおりの自律した本質的な主体観を呼び覚ますかのように見えるかもしれない。決定の場において、決定しようとする主体が、何らかの形で立ち上がってくることは否定できない。しかしその場合の主体は、構築主義的な視点に依拠するならば、決定のすべての過程を支配しうるものではなく、その決定が行われようとしている場、すなわち、他者に直面して、その他者との関係の場に参画しようとする瞬間に限定されたものである。

つまり、そこで起きる決定そのものは、これまで何度も論じてきたように、その関係に内在する多義性・偶発性の所産であり、誰にも可知化しえないものである。そしてその結果も、双方の(事前の)主体に影響していくため、その意味では、それぞれの主体は永遠に不完全でしかありえない。しかしながら、その一方で、決定の場に向かおうとする時には、いかなる主体も何らかの足場・位置が必要となるはずであり、

それがなければ、そこで他者との関係性を生むことも、何らかの決定をすることもできなくなってしまう。決定がないということは、そこに生ずるかもしれない関係性を規則へと還元し、結局は主体を従属化させていくことはすでに論じてきたとおりである。「主体を主体の位置に効果的に縫合するためには、主体が「呼びかけられている」だけでなく、主体がその位置に投資することが必要」なのである（ホール 2001: 16）⁸⁾。

とするならば、この決定の場そのものに参画するということが、すなわち、他者との可知化できない関係性を尊重し、そこに参画しようとするところこそが、主体性のより根源的な意味であり、我々は、そのためにも主体を、さまざまな他者との間に関係性を作り上げていく位置・契機として定位し直していく必要が出てくるのではないだろうか。先述のラクラウとムフは、この次元での主体には「主体」ではなく「主体位置 subject positions」という言葉を当てている。

そしてその位置が、やはり所与のものではなく、歴史的にさまざまな他者との間で構築されてきたことに気づくならば、我々はようやく構築主義的な転回を名実ともに果たしうる段階にきたと言えるだろう。つまり、主体（位置）の歴史的構築性とは、けっして主体の無根拠性を意味しているのではなく、むしろ、主体を関係性に向かって起動させ、より根源的な主体性を十全に発揮させるためには不可欠であると考えられるのである。主体は、それ自体が歴史的に作られていく多種多様で可変的な位置だからこそ、さまざまな他者との間で豊かな関係性を生み出し、決定を行っていくことができるのではないだろうか。

3.2 理論と現実との懸隔

以上、関係性という問題を積極的に評価することによって、我々はようやく新たなアイデンティティ概念を具体的に模索しうる準備ができたと言えるかもしれない。ゆえに、これまでの議論をまとめながら、その暫定的な見通しを素描しておくことにしよう。

それはまず、徹底的に構築主義的な姿勢にたつことによって他者をけっして対象化しえない「敵／友」と見なし、その他者との多義的な関係性を、そのつど具体的に決定し実践していこうとするアイデンティティである。もちろんそこにはさまざまな対立や連帯が生まれるだろうが、いずれも「敵／友」関係に貫かれているため、それはけっして固定化・規則化することはない。また、だからといって社会の無秩序化や主体の完全な消滅へと結びつくこともなく、むしろ、そうした多義的で偶発的な関係性の場における決定という問題が重要となってくる。つまり、このとき主体は、他者と

の関係性を起動しうる地点として積極的に位置づけられ、同時にそれは、他との関係性を産み出す必要があるからこそ常に多義的であり、時々々の決定を通して再構築されるという意味では永遠に不完全なものとして設定されていくのである。ここからは、さまざまな他者との関係の歴史のなかで構築してきた位置を、自らの基点および起点として他者に向かい合うと同時に、その関係性の歴史を、さらに自らに節合して変化していくアイデンティティのあり方が浮かび上がってくる。

また、この議論からは、近年の構築主義的なアイデンティティ論をめぐる批判（すなわち、本質の虚構性を暴いてきた一方で、主体や連帯をも脅かしてしまうのではないかという危惧）は、むしろいまだ構築主義が徹底されていないがゆえであったことも浮かび上がってくるであろう。本稿の関係性の議論とは、多義性や偶発性そして歴史性のなかにこそ、既述のような新たな主体や連帯のあり方が見出されるというものである。もちろんそれは、「ゆっくり休めるような夜」を保証するものではない。しかし、そうした安定的な主体や社会が、他者の排除と表裏一体であることが明らかになっている今、我々は、アイデンティティという言葉をも、むしろ不安定さのなかにこそ立脚するものとして語り直し、新たな社会のあり方を創出していこうとする作業を避けることはできないのである。

とはいえ、以上の議論はあくまでも抽象論であって、果たしてそれを、現実社会のなかで適用できるのかという疑問も出てくる。さもなければ、この議論は、単なるユートピア、机上の空論に終わってしまう可能性もある。

実際、本稿のように関係性という問題に着眼したアイデンティティ再考論は、現在ではけっして少なくない。たとえば、本稿でこれまで何度も言及してきたムフやラクラウの他にも、アイデンティティを他者との対話的な関係に決定的に依存するものと見なすテイラー（テイラー 1996）や、差違という概念をさらに徹底させて他者に対する「アゴーン的な敬意」という姿勢の重要性を主張するコノリー（コノリー 1998）など、近年の影響力のある議論には、ニュアンスの違いはあれ、同様の方向性を見て取ることができる。また、先述のエイジェンシーという語にも、いかなる関係も絶対的には対象化されえないという問題意識がうかがえる。それは、個人に対する言説の拘束力を認めながらも、その言説の使用や実践という地点では必然的にずれや攪乱が起きることに注目した言葉だからである。そして、ジャン＝リュック・ナンシーの「分有」論（ナンシー 2001）やアガンベン（Agamben 2001）の「来るべき共同体」論のように、アイデンティティという語を前面に出してはいないが、個々人は異同や表象という契機によってではなく、むしろそれぞれが有限かつ特異であるからこそ結び

つくという、根源的な複数性を基盤とする共同体のあり方を新たに提示しようとする議論もある。ここにもやはり、対象化・可知化に収斂しない関係性を模索していこうという意図が見出される。さらには、近年「敵対する歓待」や「友愛」に関する考察を深めているデリダ（デリダ 2003）など、規則や基準には陥らない関係性をめぐる議論は、今や明確に一つのうねりとして形をとりつつあるのである。

しかし問題は、先にも述べたように、これらの言わば抽象的な議論が、現実の個々具体的な諸問題と結びついた形で展開されることはなかなかないという点である。それは、一つには議論自体がまだまだ成熟していないためであろうし、また、グローバル化がさらに進んでいる現在、諸々の葛藤や紛争もいっそう激化し複雑化しているためだろうが、このままでは、現実問題にはやはり従来どおり「戦略の本質主義」で対処せざるを得ず、理論と現実とのギャップをさらに広げることになってしまう。

ゆえに、以上の議論をさらに精緻化していくためにも、本稿の後半では、こうした関係性が、実はすでに現実社会のなかにも垣間見られるのではないのか、そしてそれを積極的に指摘し理論的な裏付けをしていくことが、理論の成熟のみならず社会的な意義にもつながるのではないか、という問題意識のもとで、ある具体的な事例の考察を行っていくことにする。その事例とは、イタリア人アイデンティティである。

イタリア人という彼らの意識は、国家たるイタリアというカテゴリを利用したアイデンティティであるという意味では、いわゆるナショナル・アイデンティティの一つと言えようが、そもそもナショナル・アイデンティティとは、これまでの諸研究からも分かるように、種々のアイデンティティのなかでもしばしば最も本質主義的に取り扱われてきたものである。だからこそ多くの葛藤・紛争を引き起こしてきたし、近代の国民国家という概念自体が、「一国語・一民族・一国家」の神話に代表されるように、本質的な同一性の原理によって構成されていることに気づくならば（栗原 1998）、国民国家とアイデンティティの両概念は、近代的な思考が生んだ双生児であると見なすこともできる。

こうしたナショナル・アイデンティティのモデルに照らし合わせると、まず、イタリア人アイデンティティは、非常に脆弱であると言わざるを得ない。たとえばイタリアでは、「イタリアにはイタリア人はいない。いるのはローマ人、ミラノ人、ヴェネチア人、ナポリ人等々だ」、「イタリア人は4年に1回、ワールドカップの時にだけ生まれる」などと言われるように、彼ら自身も自らのイタリア人意識の希薄さを認めている。

しかしながら、このイタリア人アイデンティティを、それゆえにただ脆弱なナショ

ナル・アイデンティティと見なして議論を終えてしまってよいのだろうか。それとも、そこには本質との異同を基準とする従来型のナショナル・アイデンティティとは異なる語りが開かれているのか——あらためて、彼らのイタリア人意識について考察し直していきたい。

4 イタリア人アイデンティティ

4.1 「弱い」イタリア人アイデンティティ

「イタリアは成った。次はイタリア人を作らなければならない」。

これは、1861年イタリアがローマ帝国の崩壊以来の分裂を経てイタリア王国として統一されたとき、時の政治家ダゼーリオが言った台詞として伝えられているものである。もっとも、現在ではそうした事実はなかったとされている（藤澤 1997: 313）。にもかかわらず、この言葉が今でも頻繁に引用されるのは、それが、まさにイタリア人アイデンティティの脆弱さを、その歴史的な原因とともに鮮やかに示唆していると考えられているからだろう。イタリアは、イタリア王国という近代国家が成立した際、その経緯ゆえイタリアという統一国家全体を十全に象徴するものを持たず、その十分な創造も浸透も果たしえなかったという。しかもその状況は、ナショナリズムの異常な高揚期とも言えるファシズム期を経た現在でも基本的に続いていると言われ、そうしたイタリア人アイデンティティの弱さを、イタリアの近代国家史の特徴と関連させながら考察していこうとする議論は枚挙に暇がない（Dickie 1996; Porciani 1993）。

また、イタリア人アイデンティティの弱さとは、先述の「イタリアにはイタリア人はいない。いるのはローマ人、ミラノ人、ヴェネチア人、ナポリ人等々だ」という言説に代表されるように、しばしばイタリアの地域的な多様性をめぐる議論と表裏一体をなしている。言語、歴史、料理や祝祭等の民俗、自然環境等のあらゆる側面においてイタリア内部の多様性を指摘する議論はすでに数多く見られる。たとえば、72年に刊行が始まった『イタリア史』の第1巻『基本的特徴』（Romano & Vivanti eds. 1972）でもその基調が貫かれ、その議論は、しばしば、中世のムーネ時代から続いた都市国家の歴史⁹⁾や、それに起因すると言われる強固な地域主義の存在とも関連させて語られている。特に国民国家の枠組が大きく揺らいでいる近年では、地域主義への関心はさらに高まり、政治的にも各州の自治権を拡大して将来的には連邦制を導入しようとする動きが加速化しており、新たな段階に入っているという見方もある（Levy ed. 1996, Nevola ed. 2003）。

さらにイタリアの多様性は、地域というよりも、各自が生まれ育った町の次元で考える必要があるという指摘も少なくない。イタリアではしばしば、丘の上に非常に密集して町を形成するという集落形態（アグロ・タウン）が見られる¹⁰。この集落の単位性が、政治的・経済的・社会的・文化的・物理的等のあらゆる側面で高いことは、特に人類学の業績によって明らかになってきた（Filippucci 1996, 宇田川 1998）。実際、近隣の町同士でも、言葉やさまざまな慣習に違いが見られることは少なくない。心情的にも彼らの町に対する愛着は強く、その愛着を彼ら自身はカンパニリズム *campanilismo* という言葉で表現している。これは、どの町でもその中心に建設され、町の象徴となっている教会の鐘楼（カンパニーレ *campanile*）に由来する言葉である。彼らは、町の名前を形容詞化して互いに「〇〇人（〇〇は町名）」と呼び合い、特に近隣同士の町のあいだでは、慣習的な差異をことさらに強調したり、時には儀礼的な誹謗合戦¹¹を行ったりして、自らの「〇〇人」としての意識や矜持を日頃からかき立てている。もちろん近年では、人も物も情報も町を越えて行き交い、町の単位性はあらゆる意味で低下してきている。しかし彼らの生活意識は、いまだ町に置かれており、「〇〇人」という言説も有効性を保っている。町（パエーゼ *paese*）は、彼らにとって、その帰属意識、共同体意識を最も強く感じる場所なのである¹²。

さてこうしてみると、イタリア人アイデンティティの脆弱さとは、否定しがたい事実のように見えるかもしれない。しかし、すでに先触れをしたように、彼らはだからといってそのイタリア人意識を否定または棄却するどころか、しばしば積極的に用いている。

たとえば筆者は、1986年にローマ近郊のR町で調査をはじめて以来、頻繁に同調査地を訪れているが、そこでは、筆者が「イタリアの文化や社会について学びに来ている」と言うと、人々は、前述のように「イタリアにはイタリア人はいない」とか「ここはイタリアではなくRだ」等々と、半分笑いながら応ずることが多かった。また、「一番（大切なもの）は家族、二番は教会、哀れな国家は三番目」という決まり文句もあるように、彼らは自分たちの生活にとって国家が占める意味は非常に低いと見なしていた。まさに教科書どおりの「弱い」イタリア人・アイデンティティである。

しかし、その一方で彼らは、自らがイタリア人であるということを頻繁に口にしており、その様子に筆者はしばしば戸惑うことさえあった。たとえば、自分たちイタリア人は、時間を守らない、情熱的だ、陽気だ、仕事をしない等々、まさに類型的なイタリア人イメージを、時には自虐的に時には誇らしげに彼ら自身が陳述している場に

は何度も出会った。また、北イタリアの分離独立を政治目標に掲げた北部同盟（後述）の躍進時には、その行動に対する反感や抗議はR町でも大きく、彼らは「我々はイタリア人だ。イタリアを分けることはできない」と論評し合っていた。さらに興味深かったのは、外国人や外国メディアによるイタリア人イメージに対して、それが特にネガティブなものの場合、しばしば強く反応をしていたという点である。特に頻繁に聞かれたのは、イタリアといえばマフィアと結びつけられるのが嫌だという台詞であり、また、日本人がイタリア人を「世界一のバカ」だと思っているという或る調査結果がかなり大きく報道されたようで¹³⁾、「本当にそうなのか。心外だ」と、真顔で問い詰められることも度々あった。自分たちはアモーレ（愛）やマンジャーレ（食）のことばかり考えているわけではないと憤然とする者もいた。ところが、しばらく経つと、そうした抗議をしていた者が、我々イタリアはマフィアの国だ、我々イタリア人にとってアモーレは大切だなどと口にするのもしばしばあったのである。

とするならば、彼らのイタリア人アイデンティティとは、弱いとはいえ、それなりに機能しているのではないか、あるいは、それほど弱いとは言えないのではないか——我々は、ついこうした問いを立てたくなるが、その前に、この問いも含めて、そもそも彼らのイタリア人アイデンティティを弱い／強いという基準で語ろうとする言説にこそ問題があるのではないか、という点を考えておく必要があるだろう。

4.2 ナショナル・アイデンティティとしての「イタリア人」

これまで弱いと言われてきたイタリア人アイデンティティは、先のダゼーリオの台詞が好んで引用されることに象徴的に示されているように、近代国家とのかかわりのなかで意識され醸成されてきたナショナル・アイデンティティとしてのそれである。そもそも近代国家とは、周知のとおり「想像の共同体」であり、その意味では、いかなるナショナル・アイデンティティも堅固な実体があるわけではなく想像の所産であり、その想像の強度と蓄積によって支えられている。たしかにイタリアの場合、近代国家の成立時の経緯などの理由から、その想像力を有効に働かせるための資源に欠け、十分な歴史的蓄積を重ねることはできなかった。それゆえ、相対的に強度の低いイタリア国民国家の本質に対しては、そこに同化することも難しく、彼らのイタリア人意識は相対的に脆弱にならざるをえなかったとも言える。こうした視角から近代国家やナショナリズムのあり方を分類・体系化し、そのどこかにイタリアの事例を位置づけることも可能だろうし、実際、そうした試みは歴史学・政治学を中心にすでに数多く行われている。しかしここからは、イタリア人アイデンティティを弱いとみなす

言説とは、結局、ナショナル・アイデンティティの論理を下敷きにして構成されてきたことが浮かび上がってくる。極言すれば、弱いという言説自体が、その強さを求めようとする方向性に裏打ちされているのである。

実際、既述のように、特に1990年代以降イタリアでも国民国家という枠組が急激に問い直されつつあるなか (Allen & Russo eds. 1997, Peri 2000), 彼らのイタリア人意識の弱さはさらに強まっていると見なされる一方で、ナショナリズムへの傾斜とも言える議論や動きも同時に出現していることは忘れてはならない。

ヨーロッパでは、周知のとおり、昨今の国民国家の枠組みの揺らぎはEU化の動きと強く関連している。イタリアでも、通貨統合をはじめさまざまな次元で急速に整備されたEUの機構が、彼らの日常生活にも実質的な影響力を増しつつあり、たとえばヨーロッパ社会基金のように、国家以外の選択肢の一つとしても機能しはじめている。ただしイタリアは、EUの発足以前から、その加入に賛同する者が他のヨーロッパ諸国に比べて圧倒的に多かったと言われ、その理由として、しばしば彼らのナショナリズムの低さが言及されてきた (Hine 1993: 286-7)。また、先に触れた近年の地域主義の高まりも、彼らのイタリア人意識の低さと絡めて説明されるが、なかでも北部同盟 (*Lega Nord*) の躍進はその典型と目されることが多い。彼らは80年代から活動をはじめていたが、90年代に入ると、従来から大きな社会問題となっている南北格差を背景に反南部主義をかき立て、イタリアという国家枠組を否定する一方で、12世紀のロンバルディア同盟の歴史に基づく北部地域独自のアイデンティティを立ち上げて急成長した。そして1996年には「パダーニャ共和国」樹立という行動に打って出た¹⁴⁾。それは、法的な裏付けをもたないパフォーマンスであり、まさに「想像の共同体」のかりかたにすぎなかったが、日本でもイタリア国家の分裂の危機として報道されるほど大きな衝撃をもたらしたのである (Cachafeiro 2002, Gold 2003)。

しかし、こうした方向性は、他の国々と同様にその擁護へと向かう動きも生み出し、90年代は、実はイタリアという国家の枠組や歴史をあらためて確認しようとする議論が大量に生産された時代でもあった。たとえば、北部同盟が「パダーニャ共和国」樹立を宣言した際には、多くの新聞雑誌は、その主張の根拠を覆すためにイタリアの歴史をわかりやすく解説する特集を行った¹⁵⁾、特に19世紀のリソルジメント (イタリア復興運動) やイタリア統一の歴史を再評価する論調が急激に増えた。研究書の類でも、イタリアの国民意識の創出を検証した『記憶の場所』シリーズ (Isnenghi ed. 1996-97) をはじめとして、『統一イタリアの神話と歴史』 (Belardelli, Cafagna, Della Loggia & Sabbatucci 1999) や『イタリア人アイデンティティ』 (Della Loggia 1998) な

ど、国民形成をテーマとする書籍が矢継ぎ早に出版された。そして、イタリア国家の歴史にとってもう一つの核となるファシズムやレジスタンスに関しても、ファシズムこそ国民文化創出の時代と位置づけたデ・フェリーチェ (De Felice 1995) を嚆矢として、新たな視角からの議論が始まり、イタリアの近現代史研究は非常に活気を見せることになった (Davis 1994, Battente 2000-01, 北原 2002: 369-427)。

もちろんこれらの議論すべてが、イタリアという国家枠組を積極的に擁護・強化しているわけではなく、その議論もまだ途上であり、評価も簡単にはできない。しかし、ここで再度確認したいのは、イタリア人アイデンティティの弱さとは、それがいかに脆弱なものであれ、そう語られる際には常にナショナリズムとかかわってきたという点である。

とするならば、彼らのナショナル・アイデンティティは弱いというよりも、その言説自体がナショナル・アイデンティティの語りの一環であると考えられる。そしてその意味では、イタリアにおいても、ナショナル・アイデンティティという語りへの志向性自体はけっして希薄ではなかったのである。実際、たとえば北部同盟は、イタリアという国家枠組やイタリア人であることを拒否したとはいっても、ナショナル (エスニック)・アイデンティティ的な語りそのものは拒否していたわけではなく、「パダーニャ共和国」樹立に見られるように、むしろその語りに積極的に依拠したパフォーマンスを繰り広げた。また、以上のような弱いイタリア人アイデンティティとは、それこそをイタリアの特徴と見なす言説であると考えられることもできるだろう。もちろん従来、その特徴は自嘲的にしか語られてこなかったが、特に多文化主義などに対する関心が国際的に高まっている昨今、多様性が無理なく共存している点こそ「イタリア性 *italianità*」であるという論調も出てきている¹⁶⁾。前述のイタリアの連邦化という議論も、単なる地方主義の発露ではなく、統一のなかの多様性という、ナショナリズムを土台とする主張であるという見方もある (Bull 1993: 82)。これもまた、時代の変化に合わせたナショナル・アイデンティティの語り方の一つとしてみることもできるかもしれない¹⁷⁾。

4.3 もう一つのイタリア人アイデンティティ？

さてこうしてみると、先ほどの疑問、すなわち、彼らはなぜ弱いと言われるイタリア意識を手放さず積極的に用いていることすらあるのかという疑問も、すでに氷解したかに見える。弱いイタリア人意識という語りそのものも、実はナショナル・アイデンティティの語りとしての効果を発揮しうるからである。

しかしここには、もう一つ別の問いも浮かび上がってくる。それは、そもそも彼らのイタリア人であるという意識は、すべてナショナル・アイデンティティに回収されてしまうものなのか、あるいは、それを基準とする説明で済ませてしまってよいのかという問題である。ここで2章の議論に戻るならば、ナショナル・アイデンティティとは、従来型のアイデンティティ概念の典型として、国民国家というカテゴリーに即してその本質との異同を問うという概念であった。とするならば、イタリア人アイデンティティをナショナル・アイデンティティと見なすということは、彼らがイタリア人であると述べる際にはそれとの本質的な同化を意識し志向していることを認めるわけだが、果たして常にそう言えるのだろうか。

たとえば、彼らはしばしば類型的なイタリア人イメージに即しながら自らをイタリア人であると陳述していることは前節で述べたが、その際、彼らはそのイタリア人イメージに完全に同化している（しようとしている）とは考えられないに違いない。その場面では、彼らはしばしばイタリア人イメージを誇張したり自嘲的に述べたりしているように、イタリア人であることを演技していると言ったほうが適切である。このことは、たしかに彼らはイタリア人というカテゴリーを用いてはいるが、そのカテゴリーに同化することなく距離を取っており、ゆえにイタリア人の本質という問題にもそれほど拘束されていないことを意味する。したがって、そこには容易に違和感や拒否感も入り込みうるし、実際そうした場面が少なくないこともすでに指摘した。また、だからこそ、逆に類型的なイメージに抗議する場合も、それをイタリア人の本質をめぐる次元の反発と言い切ることはできず、彼らは自分で批判したはずのイタリア人イメージを別の場面では簡単に肯定したり模倣したりしているのである。

さてこうした語りから浮かび上がってくるのは、まず、イタリア人への同化や本質化ではなく、むしろ彼らがイタリア人というカテゴリー自体の内実を、イタリア人という言葉を通して交渉している様子である。それは、近年の構築主義的な議論の言説を用いれば、イタリア人というアイデンティティのパフォーマティブな実践であり、ゆえにそこで想定されているイタリア人とは、けっして一貫した本質的なそれではなく、流動的で一時的なカテゴリーであるとも言える。もちろんこうした場面にも、本質的なナショナル・アイデンティティの語りが滑り込んでいる場合も少なくない。特に類型的なイタリア人イメージに反論する際には、他者のコロニアルな視線によって本質化されたイタリア人への反発という語り方になることが多く、そこに「真のイタリア人」という意識を読みとることができないわけではない。しかし注目すべきは、たととしても、そこには以上のように本質的なアイデンティティの語りとは異なる位相

も確実に見出せるという点である。また、こうした類型的なイタリア人イメージは、いわゆるナショナル・アイデンティティの本質となりうるような歴史的な事件等に依拠するものではないため、それをイタリア人アイデンティティの問題として考察すること自体が不適當であるという批判もあろう。ただし、彼らのイタリア人という語りがこうした場面でも頻繁になされるならば、彼らのイタリア人意識はその場でも醸成されていくはずであり、むしろその場を抜きに考察することのほうが、イタリア人アイデンティティをナショナルなそれに限定しようという営為につながり、適當でないと言えるに違いない。

そして、もう一つ注目したいのは、こうしたイタリア人アイデンティティには、それがただ本質化を志向しないというばかりでなく、むしろ（だからこそ）、他者との関係を志向するという側面が顕わになっている点である。ここで、この問題を考えるきっかけとなった事例を紹介しておこう。

1989年2月24日、筆者は調査のためにローマの近郊のR町（仮称）に滞在していた。その日、ある用事で隣のP町を訪れ、郵便局に立ち寄ったところ、入り口にイタリア国旗が半旗で掲げられているのに気づいた。イタリアまたはP町にかかわるような用事が何かあったのだろうか、少なくとも筆者には思い当たることはなく、同行していたイタリア人（R町住民）も分からないという返事だった。ただ、ふと思いついたのは、この日は日本で昭和天皇の大葬の礼が行われたはずだということだった。しかし、まさかそれが理由ではないだろうと思いつながら、窓口で聞いて見ると、果たして「今日は、あなたの国の天皇の葬式でしょう。だからです」という答えが返ってきた。筆者はちょっと驚いて、イタリアでは外国の要人が亡くなると国旗を掲げるのか、それともP町だけのことなのか等々の質問を投げかけた。というのも、その日R町では半旗を見た記憶がなかったからである。

結局、そのやり取りのなかで分かったのは、この半旗掲揚が、その日の朝のニュースで大葬の礼を知った局長の発案で、この郵便局独自の判断で行われたということだった。ただしP町または局長が、日本と何か特別な関係にあるわけではなく、P町は、ローマ近郊とはいえ、日本人観光客が訪れることもほとんどなかった。そして最後に筆者が、「日本の天皇の葬式のために弔意を表していただけるとは感謝します」旨を述べると、彼らの一人が、「当然のことです。あなた方の悲しみは、我々イタリア人にとっても非常に遺憾なことなのです」と返答したのである。

もちろんこの事例も、日本とイタリアが第2次世界大戦時に同盟国同士であり、その記憶をもつ者も少なくないことを考えれば、ナショナル・アイデンティティ的な論理で説明することも可能である。また、筆者は残念ながら確認することはできなかったが、少なくとも局長はそうしたナショナリズム的な政治信条を持ち、それに基づいて国旗掲揚に至ったのかもしれない。ただし、たとえそうであったとしても、ここで筆者の関心を引いたのは、筆者と話をした局員たちの対応であり、そのなかでの「我々イタリア人」という言葉であった。

実際、この言葉が発せられた場面そのものに注視するならば、その「イタリア人」とは、「我々イタリア人」の本質へ回帰しようとする言葉であるというよりは、むしろ「あなた方日本人」との関係を生み出す言葉として機能していると言えるだろう。彼らは、この言葉を使うことによって、自分たちの問題ではなく、日本人への弔意という形の、他者との関係を生じさせていると考えられるからである。

そもそもアイデンティティとは、すでに2章でも指摘したように、他との差異が構造的に組み込まれている概念である。それは簡単に言えば、他がなければ自己意識もないということだが、その差異が異同という語りにすり替えられることによって固定化・本質化してしまうことが、現在のアイデンティティの問題点であることも述べてきた。つまり、エピグラフのクロスバーグの言葉のように「差異からアイデンティティを構成するのではなく、アイデンティティから差異を構成する」という問題である。

しかし、これに対して、上記の例で用いられた「イタリア人」とは、(少なくとも一面では)他者(この場合は日本)との出会いのなかで立ち上がってきた言葉であると考えられる。すなわち彼らは、他者との関係性に自らを投企するためにイタリア人であるというカテゴリーを用いたのであって、とするならば、この場面での「イタリア人であること」とは、根源的にそうした他者との関係性に依拠するアイデンティティの発露、つまり「差異から構成されたアイデンティティ」のあり方として評価することもできるのではないだろうか。

そして、この側面に気付くならば、同様のことはこの事例のみならず、他のイタリア人アイデンティティ表出の場面にも見出すことができるに違いない。たとえば、先に述べた類型的なイタリア人意識とは、たいていは筆者などの外国人の存在が関与している場で表出されるものであった。これは、一見当たり前のことかもしれないが、我々は、彼らが様々な外国人と出会った際に、類型的なイタリア人イメージを頻繁に利用して演技しているのは、他者との関係を生み出すためであることにさらに注目す

る必要があるだろう。実際、筆者は、彼らがしばしば話のきっかけや盛り上がり的手段として自らイタリア人であることに言及している場面に頻繁に出くわした。彼らはそこで、自らをイタリア人であると述べるとともに、しばしば相手をも〇〇人（筆者の場合は「日本人」）と見なしながら典型的な掛け合いを好んで演じていたが¹⁸⁾、その際、彼らの一義的な関心は、自分や相手に対する本質化ではなく、自らその関係性に参画しそれを出現させることにあったと考えられる。「イタリア人」（そして「〇〇人」も）とは、こうした他者との関係性への基点および起点であり、その意味では、彼らにとっては自己性の表出そのものであるとも言えるのである。

ゆえに、筆者は先に、彼らのパフォーマンスなイタリア人アイデンティティの実践はその固定化・本質化にはつながらないと述べたが、それはむしろ、彼らのイタリア人アイデンティティが根源的には関係性に貫かれているがゆえの現象であると言ったほうがよいだろう。もちろん、そこで発せられた「イタリア人」（および相手方の「〇〇人」も）は再帰的に反省されるならば、単なる基点・起点を越えて本質として解釈され、本質化することもある。また、これが国民国家の枠組を背景とする言葉であるかぎり、そもそもこの言葉の使用に当たってはその枠組の存在が影響を与えていることを無視することはできない。しかし、こうしたイタリア人アイデンティティの実践では、イタリア人カテゴリーが再び基点・起点として次なる交渉にさらされるがゆえに、その本質化は、実践が続けられる限り果てしなく交渉され、ずらされていく。その結果、今後さらに国民国家の枠組みが相対化されていくとともに、イタリア人というカテゴリー自体の意味が低下し、その存在自体が問い直されていくということもあるかもしれない。そしてこの実践には、そうした脱本質化の効用があるということ以上に、他者との関係を創出させるという意味での自己性の開示が含まれているからこそ、彼らは、カテゴリーの本質化という危険性と表裏一体になりながらも、イタリア人という言葉を頻繁に用いて自分を表明しようとしているのだとも言えるのではないだろうか。

5 おわりに

さて以上、通常はナショナル・アイデンティティとされるイタリア人アイデンティティの語りには、ナショナル・アイデンティティへと結晶化することなく、他者との関係性の生成にこそ重点を置いたアイデンティティの表出へと開いていこうとする位相も見てとれることを指摘してきた。もちろんその考察は、いまだわずかな事例に基

づくものあり、不十分な点が少なくない。とはいえ、そこに浮かび上がってきた位相が、自他それぞれの本質化という機制ではなく、他者との関係性と、そこに自らを投企しようとする意味での自己性を原理としているという意味では、3章で述べた新たなアイデンティティの語りの具体的な事例の一つとして評価できるだろうし、とするならば以上の試論は、たんにイタリア人アイデンティティの問題を超えて、今後のアイデンティティ論一般に対しても興味深い議論を喚起すると考えられる。

ゆえに、そのためにも筆者はイタリア人アイデンティティの考察を今後さらに続けていくつもりだが、もう一つ、この新たな位相は、イタリア人アイデンティティの事例に限定されるものではないことを最後に付け加えておく。

たしかにイタリアの場合、ナショナル・アイデンティティの語り自体にその弱さという言説が含まれているため、本質化に回収されないアイデンティティのあり方が比較的容易に表出しやすい土壌があるかもしれない。しかし、イタリアに限らず、我々の生活をそうした視線からあらためて振り返ってみると、実は、類似のアイデンティティの実践が身近にあまた浮かび上がってくる。それは、たとえば日本人アイデンティティの実践に見出すことも可能だろうし、性、民族、階層などの他のカテゴリーに関しても同様である。我々はそれらのアイデンティティを、常に自他の本質化だけを念頭に表出しているわけではなく、他者との関係の創出の契機としてもしばしば用いているだろう。その意味では、この位相はけっして新しいものはなく、むしろ当たり前であるという見方もできる。繰り返すが、そもそもアイデンティティとは差異をその構成原理とするものだからである。

しかし問題は、これも繰り返しになるが、これまでのアイデンティティは、それがどんなものであれ、本質化を志向する語りへと回収されてしまう傾向が強かったという点である。たとえ別の語り方があるとしても、それはなかなか言説化されず、それゆえアイデンティティはなおさら本質化の呪縛に囚われていったのである。

このことは、現在のアイデンティティ問題の源泉にあるのは、本質的なアイデンティティ（あるいはそれ以外のアイデンティティ）が実在するか否かという従来の構築主義者が好んで立てたような問題ではなく、その語り方であるということの意味している。実際、前章で述べた関係性に関われたイタリア人アイデンティティも、それが実体としてナショナル・アイデンティティと別個に存在しているわけではないことに注意しておきたい。そこでは本質化と脱本質化が互いに浸透しあっているとすでに述べたように、両者はイタリア人アイデンティティの実践における位相の違いである。とするならば、アイデンティティ問題が多く混沌を抱えている今、我々はその

語り方に注目し、それがどんな効果を生み出して機能しているのかを検討しつつ、その語り方こそを異化し、変えていく必要があるのではないだろうか。そしてそのためには、別の位相がたとえわずかな兆候であっても見出せるならば、それを積極的に評価し理論化していくことも大きな力となっていくに違いない。本稿は、こうした問題意識に立ち、その一例として、イタリア人アイデンティティに注目したのである。

もちろん近年のアイデンティティ論では、1章でも述べたようにアイデンティティという言葉がこれまでもたらしてきた弊害や混乱がきわめて膨大なため、この言葉自体を棄却すべきであるという見解もある。また、そもそもアイデンティティの土台たるカテゴリー自体が虚構であるとして、その呪縛を逃れようとする向きもある。しかし、我々はみな社会のなかで存在している限り、そこで展開されているさまざまなカテゴリーなしに生きることはできず、それこそが現実であることを忘れてはならない。このため安易なアイデンティティ概念の拒絶は、そうした現実からの逃避であるとともに、その現実を生きて変えていく手段をも放棄することになってしまうだろう。アイデンティティは、先に詳しく述べたように、自己性と関係性の両側面を含み、その両側面が密接にかかわっている概念でもある。とするならば、アイデンティティ概念の再生の試みとは、従来の主体性（自己性）という概念や自他の関係性の根本的な再考でもあり、その意味では、実は新たな社会のあり方の模索にもつながっていくのではないだろうか。

実際、こうした自他の関係性こそが、多文化主義、多元的共生、公共性等々の言葉の流布からも推察されるように、近年の最大の社会問題の一つであることはもはや言うまでもない。ここ数十年、これまで一方的に他者化されてきた人々が、十全な承認を求めて闘争を繰り返してきた過程で明らかになってきたのは、一つには、自己が十全に自己足りうるには、他者による承認が必要だということである。人は、自分（自分たち）だけではその生を十全に発揮することはできない。アーレントの言葉によれば、「リアリティというのは、人々が見られ、聞かれ、そして一般的に、仲間の聴衆の前に姿を現すことから生まれてくるもの」（アーレント 1994: 319）だからである。ただし、その際、各自が自分の意図通りに承認されることだけを要求していくならば、相手との共約可能性を閉じ、さらなる闘争を生み出してしまうことも浮かび上がってきた。すなわち、他者との関係性を想定しない単なる自己主張としての承認は、かつての他者による一方的な表象化の営為となら変わりはなかったのであり、とするならば、我々は今こそ、自己というものも、他者との関係というものも根本から再構築しなければならないのである。

アイデンティティは、今やこうした自他の関係性問題の元凶にすらなっていると言われる概念だが、だからこそ、その再生の試みは新たな社会像に向けた試行錯誤となるはずである。我々が今後もアイデンティティという問題に注目し続けていく最大の意義とは、この点にある。本稿も、そうした問題意識ののちとして、イタリア人アイデンティティという具体例に寄り添いながら、関係性という概念を重視するアイデンティティというあり方を浮かび上がらせてきたわけだが、それは出発点に過ぎない。今後もさらに考察を重ねて、アイデンティティを論じながらもそれを越えていくアイデンティティ論の模索を目指していきたい。

謝 辞

本稿の執筆中には、本研究報告の査読者の方々から、特に後半のイタリア人アイデンティティの部分を中心に貴重なご意見をいただいた。この場を借りて御礼を申し上げます。

注

- 1) 特に日本におけるアイデンティティという語の普及の背景に関しては、西川（2000）と伊東（2000）に詳しい。なかでも、その背景の一つとして、1970年代の消費社会化の流れに注目した伊東の指摘は興味深い。
- 2) この言葉は、昨年末に出版された上野千鶴子編『脱アイデンティティ』（2005）の書籍の帯にも「賞味期限切れの概念に問題提起」と書かれていた。
- 3) アイデンティティの複数性・多元性とは、単純に複数のアイデンティティが東になっており、それらが場面によって使い分けがなされているというだけではない。その最も肝要な点は、そのどれかが表面化する場合であっても、互いに影響を及ぼしあっているという点であり、これが後の引用のなかでムフのいう「重層的な決定」の意味するところである。
- 4) エイジェンシー agency とは、近年バトラー等によって、特に主体 subject と対比されて使われるようになってきた言葉である。すなわち後者が、結局はイデオロギーに「従属」させられてしまうのに対して、エイジェンシーは、イデオロギーに呼びかけられるだけでなく、同時に呼びかけることによって抵抗や変革の可能性を含蓄する概念とされているが、まだ十分に論議が尽くされているとは言えない。日本語では、バトラーの翻訳者である竹村和子によって「行為体」という訳語が定着しつつある。
- 5) たしかに人類学においては、モースの人格論以来、啓蒙主義的な主体概念とは異なる関係主義的な主体観について、具体的な事例を用いながら盛んに議論がなされてきた。ただし、その議論が非西洋社会の事例に基づいていることから分かるとおり、そこにはコロニアルな視点が関与していることは否定できない。スパイロの議論は、こうした単純な二項対立的な図式に侵食されている人類学の人格論・個人論を覆すために試みられたものである。
- 6) もちろん、この問題を考えるためには、そもそも自己性（自己であるという意識）とは何かという問いに取り組んでいく必要がある。ただし自己性が同一性のなかでも別の位置を占めていることは、事物にとっての同一性と、人（行為者）にとっての同一性に意味の差が出てくることから推察することができる。リオータルも論じているように、単なる同一性は事物でも成立するが、人の場合、同一性とはただ同じというだけでなく、自己という問題系につながる側面が出てくるのである。
- 7) これは、別の観点から見れば、酒井等のいう「種的同一性」という問題（酒井 1996）に匹敵する。酒井によれば、近代とは、社会を何らかの同質性をもつ全体として想定し、そこに個々人を直接的に結びつけ同一化しようとする論理が強く、それを「種的同一性」と名付

- けた。その構造は、まさに異同を指標として自他を分けていく同一性のあり方である。
- 8) ホールは、同様の箇所でも、アイデンティティについて以下のように述べている。それは「呼びかけ」ようとする試み、語りかける試み、特定の言説の社会的主体としての我々を場所に招き入れようとする試みをする言説・実践と、主体を生産し、「語りかけられる」ことのできる主体として我々を構築するプロセスのとの出会いの点、〈縫合〉の点という意味である」(ホール 2001: 15)。ここには、自他の観念を再構築して、アイデンティティを関係性のなかに新たに位置づけようとする試みが明白に見られる。
 - 9) イタリアはしばしば都市国家の歴史を持つと言われるが、この言説自体が、実はイタリアの地域的多様性に関する言説によって過度に誇張されたものであることも断っておく。たしかに北部・中部地域では多くの都市国家が乱立したが、実は南部は、12世紀以降、多少の紆余曲折はあれ、シチリア王国(時にナポリ王国)という中央集権国家によって統一されていたのである。もっとも、その政権は外部勢力による傀儡であることも多く、統治力は非常に低かったと言われている。
 - 10) アグロタウンと言われる丘上の集住形態は、イタリアの北部や海岸部では相対的に少ない。しかし、それらの地域でも、教会を中心とする集住の形は広く見られる。
 - 11) イタリアの多くの民族誌では、どの町でも近隣の町々と敵対関係にあり、互いに悪口を言ったり、祭りを邪魔したりするなど、多分に儀礼的な反目をし合っていることが報告されているが、しばしば、そのなかでも最も敵対する相手が決まっている場合がある。筆者の調査地 R 町も、隣の M 町とそうした敵対関係にあり、かつては互いの守護聖人祭の妨害を企てたり、相手の町民が自分の町に入ってくると喧嘩をふっかけたりしたことがあったと話している。ただし、そうした反目の原因については、大抵は知られていないことが多い。ゆえにただ反目しあっているだけの、言わば純粋な、こうした鏡像的な敵対関係が何を意味するのかは非常に興味深い。同様のことは、ピット＝リヴァースの『シエラの人々』をはじめとして、スペイン等の南ヨーロッパの民族誌にも見出される。
 - 12) ここで言及している町、すなわちパエーゼとは、彼等が生まれ育った世界としての町である。それは、しばしば行政単位としての町(イタリア語ではコムネ *comune*) と重なるが、本質的に異なるものとして考えていく必要がある。このパエーゼの重要性とは、それが彼等にとっては生活世界の象徴であるという点に見出されることは、筆者も拙稿で指摘したことがあるが(宇田川 1998b)、ほかにも、このパエーゼという概念をとおしてイタリアの国家という問題を再考していこうとする興味深い論もある(Romano 1997)。
 - 13) 1986年 Dime 誌(発行地:東京)で行われた外国に対するイメージ調査で、イタリアが最もバカな国に選ばれた。その結果が在日イタリア人ジャーナリストの目にとまり、イタリア国内でも大きく報道されさまざまなコメントがなされた。その詳しい経緯については Marazzi (1997) を参照のこと。
 - 14) 1996年9月15日、北部同盟の党首ボッシが、ヴェネチアを首都とする北部地域の独立国家「パダーニャ共和国」を宣言した。独自の省庁、議会、警察をはじめとする国家機構も作られており、国語として北部の方言を採用し、独立通貨として「北部リラ」を構想して貨幣まで印刷するなど、念の入ったパフォーマンスが繰り返された。もちろんそれらに実質的な効力はないが、現在でも、同日は独立記念日と称され、記念行事が行われるなどの象徴的な活動は活発に行われている。
 - 15) イタリアの新聞雑誌にはしばしばさまざまな付録が付いているが、この時期の付録としては、イタリア統一の過程を表示した地図やその歴史をまとめた小冊子等がさかんにみられた。
 - 16) たとえば、2000年のシドニー・オリンピック開会式でのイタリア選手団の服装は、それまでのナショナルカラーである青を基調としたものから一変し、黒のジャケットを統一しながらも、ボトムはそれぞれが赤・黄・青・緑・ベージュの単色で彩られたスカートとズボンを着用するというデザインで話題を集めた。これはベネトンのデザインによるもので、5色はそれぞれに5大陸を表現するものとされていたが、そこには、多様性が共存するイタリア、そして多様性が共存する世界というメッセージがあったことは明らかだろう。翌日のイタリア各紙でも、陽気で(時に隊列も組まずバラバラに歩いている)マルチカラーな選手団の行進を、イタリアらしさの喪失ではなく、これこそが新たな「イタリア性 *italianità*」であるという論調が目についた(*La Stampa* 2000/9/16, *La Repubblica* 2000/9/16)
 - 17) 最近、マルチ・エスニックやマルチ・カルチュラルであることが、それをカナダやオーストラリアが国是としたように、国際政治の場面における独自性主張の有効な手段の一つとな

りつつある。そうした政策が実際に進められる過程では、「文化や民族の境界を超えた、さまざまな文化や民族の出会いと融合が、アイデンティティの思いがけない変容や構造変化もたらす可能性が予想され」（西川 2001: 415）、それは真の意味での「他に類を見ないアイデンティティ」につながっていくかもしれないという評価もある。しかし、そうした多様性言説の政治的な利用が、実際にはいまだ不十分な多文化状況を置き去りにしてしまうという危険性も少なくない。

- 18) このことから、アイデンティの問題とは、当然、自称としてのそれ（すなわち主体化）ばかりでなく他称としてのそれ（すなわち他者化）にもかかわることは明らかである。アイデンティティとは、それがいわゆる主体にかかわるがゆえに前者に力点が置かれ、本稿もその論調に従っているが、主体化も他者化も本質化の一側面であることを忘れてはならない。

文 献

外国語文献

- Agamben, G.
2001 *La Comunità che Viene*. Torino: Bollati Boringhieri.
- Allen, B. & M. Russo, (eds.)
1997 *Revisoning Italy: National Identity and Global Culture*, University of Minnesotan Press: Minneapolis.
- Battente, Saverio
2000 Nation and State Building in Italy: Recent Historiographical Interpretations (1989–1997) 1, *Journal of Modern Italian Studies* 5: 310–321.
- Battente, S.
2001 Nation and State Building in Italy: Recent Historiographical Interpretations (1989–1997) 2, *Journal of Modern Italian Studies* 6: 94–105.
- Belardelli, G, L. Cafagna, E. G. della Loggia & G. Sabbatucci
1999 *Miti e Storie dell'Italia unita*, Il Mulino: Milano.
- Brubaker, R.
1996 *Nationalism Reframed: Nationhood and the National Question in the New Europe*, Cambridge University Press: Cambridge.
- Bull, A.
1994 Regionalism in Italy, Peter Wagstaff (ed.) *Regionalism in Europe*, Intellect: Oxford.
- Cachafeiro, Margarita G.
2002 *Ethnicity and Nationalism in Italian Politics: Inventing the Padania: Lega Nord and the Northern Question*. Ashgate: Hampshire.
- Calhoun, C.
1994 Social Theory and the Politics of Identity. Craig Calhoun (ed.) *Social Theory and the Politics of Identity*, Blackwell: Oxford.
- Cohen, A.
1994 *Self Consciousness: An Alternative Anthropology of Identity*. Routledge: London & New York.
- Davis, John A.
1994 Remapping Italy's Path to the Twentieth Century. *Journal of Modern History* 66: 291–320.
- De Felice, R.
1995 *Rosso e Nero*, Baldini & Castoldi: Milano.
- Della Loggia, Ernesto G.
1998 *L'identità Italiana*, Il Mulino: Milano.
- Dickie, J.
1996 Imagined Italies. D. Forgacs & R. Lumley (eds.) *Italian Cultural Studies: An Introduction*,

- Oxford University Press: Oxford.
- Erikson, Erik H.
1979 (1969) *Gandhi's Truth*, Norton: New York.
- Filippucci, P.
1996 Anthropological Perspectives on Culture in Italy, D. Forgacs & R. Lumley (eds.) *Italian Cultural Studies: An Introduction*, Oxford University Press: Oxford.
- Gold, Thomas W.
2003 *The Lega Nord and Contemporary Politics in Italy*, Palgrave Macmillan: New York.
- Isnenghi, M.
1996-7 *I Luoghi della Memoria*, 3 vols, Laterza: Roma-Bari.
- Hall, S.
1992 The Question of Cultural Identity. In S. Hall, David Held & Tony McGrew (eds.) *Modernity and Its Futures*, Polity Press: Cambridge.
- Hall, S.
1995 Fantasy, Identity, Politics. E. Carter, J. Donald & J. Squires (eds.) *Cultural Remix: Theories of Politics and the Popular*, Lawrence & Wishart: London.
- Harris, Grace G.
1989 Concepts of Individual, Self, and Person in Description and Analysis. In *American Anthropologist* 91: 599-612.
- Hine, D.
1993 *Governing Italy: The Politics of Bargained Pluralism*. Oxford University Press: Oxford.
- Kuper, Adam
2003 The Return of the Native. *Current Anthropology* 44 (3): 389-402.
- Levy, Carl (ed.)
1996 *Italian Regionalism: History, Identity and Politics*, Berg: Oxford.
- Marazzi, A.
1997 If the Japanese Are Samurai, the Italians Are *Baka*. B. Allen & M. Russo (eds.) *Revisioning Italy: National Identity and Global Culture*, University of Minnesota Press: Minneapolis.
- Peri, P.
2000 Italy: An Imperfect Union. L. Hagendoorn, G. Csepeli, H. Dekker & R. Farnen (eds.) *European Nations and Nationalism*, Ashgate: Aldershot.
- Pirandello, L.
1992 (1925) *Uno, Nessuno e Centomila*, Mondadori: Milano.
- Porciani, I.
1993 Stato e Nazione: L'immagine Debole dell'Italia. In S. Soldani & G. Turi (eds.) *Fare gli Italiani* vol. 1, Il Mulino: Milano.
- Romano, R.
1997 *Paese Italia: Venti Secoli di Identità*, 2nd edition, Universale Donzelli: Roma.
- Romano, R. & Corrado V. (eds.)
1972 *Storia d'Italia: I Caratteri Originali*, Einaudi: Torino.
- Sökefeld, M.
1999 Debating Self, Identity, and Culture in Anthropology. In *Current Anthropology* 40 (4): 417-447.
- Spiro, Melford E.
1993 Is the Western Conception of the Self "Peculiar" within the Context of the World Cultures? *Ethos* 21: 107-153.

日本語文献

- アレグザンダー, J. 他編
1998 『ミクロ—マクロ・リンクの社会理論』石井幸夫他訳, 東京: 新泉社 (原著 1987年)。
- アーレント, H.
1994 『人間の条件』ちくま学芸文庫, 東京: 筑摩書房 (原著 1958年)。

宇田川 アイデンティティ概念の再構築の試み

伊東章子

2000 「イデオロギーとしてのアイデンティティ——1970年代消費社会に即して——」『言語文化研究』12(3), 37-52。

上野千鶴子編

2005 『脱アイデンティティ』東京：勁草書房。

宇田川妙子

1998a 「「女性」概念の解体の行方：表象・アイデンティティという危機」『民博通信』80, 63-71。

宇田川妙子

1998b 「イタリアにおけるさまざまな共同体意識」中牧弘允編『共同体の二〇世紀』ドメス出版。

北原 敦

2002 『イタリア現代史研究』東京：岩波書店。

草津 攻

1993 「アイデンティティ」森岡清美他編『新社会学辞典』東京：有斐閣。

草津 攻

1995 「アイデンティティの社会学」岩波講座現代社会学2『自我・主体・アイデンティティ』東京：岩波書店, 85-106。

栗原 彬

1997 「アイデンティティ」木田元他編『コンサイス 20 世紀思想事典』第2版, 東京：三省堂。

グロスバーク, L.

2001 「アイデンティティとカルチュラル・スタディーズ：それがすべてか？」佐復秀樹訳, H. スチュワート他編『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』東京：大村書店(原著 1996年)。

コノリー, W.

1998 『アイデンティティ／差異：他者性の政治』杉田敦他訳, 東京：岩波書店(原著 1991年)。

酒井直樹

1996 『死産される日本語・日本人』東京：新曜社。

テイラー, C.

1996 「承認をめぐる政治」, ガットマン, E. 編『マルチカルチュラリズム』佐々木毅他訳, 東京：岩波書店(原著 1994年)。

デュモン, L.

1993 『個人主義論考』渡辺公三・浅野房一訳, 東京：言叢社(原著 1983年)。

デュルケーム, E.

1997 『社会学的方法の基準』宮島喬訳, 東京：岩波書店(原著 1895年)。

デリダ, J.

2003 『友愛のポリティクス』1・2, 鶴飼哲他訳, 東京：みすず書房(原著 1994年)。

ナンシー, J.

2001 『無為の共同体：哲学を問い直す分有の思考』西谷修他訳, 東京：以文社(原著 1999年)。

ナンシー, J. 編

1996 『主体の後に誰が来るのか?』港道隆他訳, 東京：現代企画室(原著 1989年)。

西川長夫

2000 「多文化主義とアイデンティティ概念をめぐる二、三の考察——アイデンティティ論のために——」『言語文化研究』12(3), 23-35。

西川長夫

2001 『増補 国境の越え方 国民国家論序説』東京：平凡社。

バトラー, J.

1999 『ジェンダー・トラブル：フェミニズムとアイデンティティの攪乱』竹村和子訳, 青土社(原著 1990年)。

藤澤房俊

1997 『大理石の祖国：近代イタリアの国民形成』東京：筑摩書房。

- ホール, S.
1999 「新旧のアイデンティティ, 新旧のエスニシティ」, A.D. キング編『現代社会とアイデンティティ表現 文化とグローバル化』山中弘他訳, 町田: 玉川大学出版部 (原著 1991 年)。
- ホール, S.
2001 「誰がアイデンティティを必要とするのか?」宇波彰訳, H. スチュワー他編『カルチュラル・アイデンティティの諸問題』東京: 大村書店 (原著 1996 年)。
- 三浦玲一
2004 「はじめに: 文化アイデンティティの歴史と現在」, 恒河邦夫他編『文化アイデンティティの行方: 一橋大学言語社会研究科 国際シンポジウムの記録』, 東京: 彩流社, 7-20。
- ムフ, C.
1998 『政治的なるものの再興』千葉真他訳, 東京: 日本経済評論社 (原著 1993 年)。
- ラクラウ, E. & ムフ, C.
2000 『ポスト・マルクス主義と政治: 根元的民主主義のために』復刻新版, 山崎カヲル・石澤武訳, 東京: 大村書店 (原著 1985 年)。
- リオタール, P.
1996 『他者のような自己自身』久米博訳, 東京: 法政大学出版局 (原著 1990 年)。